

## 第 105 回日本精神神経学会総会

## 教育講演

## 統合失調症の不思議（集団遺伝学から見た統合失調症）

南光 進一郎（帝京大学医学部精神神経科）

遺伝学研究の目的のひとつは個体間の違いの成り立ちを明らかにすることである。梅には紅い花が咲く木と白い花が咲く木があるのはなぜか、A君には優れた音楽的才能があるのにB君が音痴なのはなぜか、というような個体差の「成因」、あるいは病気の場合は「病因」を明らかにすることである。なぜこの人が統合失調症に罹り、私が統合失調症に罹らなかったのか、それは持って生まれた素質（遺伝）と出会った環境の違いで説明されている。

現在から見てこれが統合失調症であろうという最初の記載は英仏のハスラムとピネルによって独立になされた<sup>1)</sup>。「思春期から青年期におきる、この救いのないそして人間の品位をそこなう病いをわたしは痛ましい思いでみつめた。この病いは、前途有望で知性のあふれた活発な若者を、わずかな間によだれを垂らしたしまりのない愚鈍なものに変えてしまうのである」（ハスラム，1809）

これだけの大きな変化（かつては人格変化、ドイツ語では本質の変化 *Wesensveränderung* とよばれた）をもたらす病の痕跡を求めて、この100年にわたり山のような神経病理学研究が行われたが、なんら成果を得られず統合失調症研究は神経病理研究者の墓場とまで擲棄された。なぜ粗大な生物学的変化が見つからないのか？統合失調症の不思議（謎）の最たるものである。

この病が、なぜ19～20世紀初頭に突如として

出現したのか、いやそもそも統合失調症は昔からある病気なのか、少なくとも古代シュメールやバビロニアの楔形文字の中には今日の老年期認知症や重症のうつ病と考えられる記載はあるが、統合失調症らしき病気の記載はない<sup>1)</sup>。同じくヒポクラテスの時代にも統合失調症以外のこころの病気（たとえばヒステリーやメランコリー）については詳細に記載されていることは周知であるが、統合失調症らしき病気の記載がないのは不思議である。当時の幻覚や妄想症状はほとんど中毒性ないし症状性に出現したものである。

人の生の短いスパンから考えると今ある病気はかつてありまたこれからもあるように考えたいが、猛威をふるったペストは全く撲滅し、近年では結核やエイズは問題にならなくなった。かわってSARSや豚インフルエンザが脅威となっている。長寿化社会になってアルツハイマー病がトピックである。統合失調症が昔からありこれからもある、と考えることもできるが、この200年の間に登場した病であると考えても不思議でない。

ここでアナロジーとしての糖尿病を考えてみよう。糖尿病は昔からあった病気なのか？なるほどギリシャの文献には尿が甘い人について記載されている。しかし当時は糖尿病は問題にならなかった。騒がれるようになったのは高々この50年であろう。まさに現代の病である。というのはこの最近の50年を除けば人類の歴史のすべてが飢餓



図 1657年のサルペトリエールへの売春婦の収容  
(Étienne Jeaurat, 1755年作, カルナバレ美術館)

との戦いだったからである。したがって現在の人類の遺伝子プールには血糖値を上げる遺伝子は数多くあっても下げる遺伝子はほとんどない。この飢餓の環境に耐えるように何千年の歴史をへてこのような遺伝子プールが形成されてきたからである。

しかし現代のように飽食の時代となると血糖値を下げる遺伝子をもった個体がこの環境に適応的となり、徐々に人類の遺伝子プールに蓄積されてゆくだろう。そしてついには血糖値を下げる遺伝子をもった個体が大多数を占めるようになると、糖尿病は消滅していくであろう。現代病(=生活習慣病)とされる高脂血症や高血圧症でも同じように類推できる。このように考えると病気の出現は人類の遺伝子プールが急激な環境の変化に追いつかないときに起きる一時的な現象で、新しい環境に適応する遺伝子プールの形成と共に病気は消

滅する。統合失調症も消滅していくであろう。このように生物は環境によって自らの遺伝子プールを変えて新たな環境に適応してゆく。すなわち環境が遺伝子を変えると主張したラマルク学説は個体レベルでは誤りとされたが集団レベルでは妥当なのである<sup>2)</sup>。

ところで集団遺伝学からみると突然病気が出現するときには必ず環境の劇的な変化がある。というのは病に関係する遺伝子プールは急激には変化しないからで、病の急激な増加は環境の関数といえる。その環境とは何か。クレペリンのいうように列車旅行すなわち都市化=産業革命の影響なのか。

ベルサイユ宮殿建造に先立つ1656年ルイ14世はパリのサルペトリエールに貧民収容施設を設置し、路上生活者・貧民(今でいうとホームレスに一番近いであろうか)を収容した\*。これらのホ

\*有名なジョレーの絵画「1657年のサルペトリエールへの売春婦の収容」(図)はそれを物語っている。作者がなぜこのような画題に関心を持ったのか、当時としてはかなり注目を集める事件であったのだろう。売春婦の服装が貧民とは思えないほど華美である。

ームレスは18世紀のリンネに代表される分類学の勃興と共に、それぞれ個別に売春婦・犯罪者・乞食、よっぱらい・身体障害（神経病）・精神病・知恵おくれと分類されていた。学問の初めには分類がある。このようにみるとサルペトリエールへのホームレスの収容と分類がおこなわれた17世紀後半から18世紀を統合失調症登場前夜と呼ぶことができよう。

サルペトリエールのあふれかえっている収容者たち、犯罪者や売春婦、よっぱらい、こじき、肢体不自由者などの中から150年を経て、上にみたようにピネルとハスラムによって今日の統合失調症の原型が発見され、グリーンジャーの「精神病は脳病である」とのテーゼをへて、20世紀初頭に神経・筋疾患、ヒステリー・精神遅滞、そして二大精神病と今日の精神医学の疾病分類が確立していった。

ところでこのようなホームレスはそれまでどのように処遇されていたのか。それはヨーロッパじゅういたるところにみられる奇跡による癒しである。ヨハネ福音書5章：1～9節には以下のようにある。「エルサレムのベトザタという地に、温泉が湧き出る療養所があり、多くの人が病の治癒のため訪れていた。その中に、38年間も病気が治らない人がいた。（中略）イエスはこの人に言った「治りたいか」（中略）「起きて、歩きなさい」するとこの人はすぐに癒され歩いた」。今日の観点からみるとこの現象は「転換性障害」の治

療にほかならない。イエスの奇跡も18世紀はじめパリのサンメダール教会で起きた数年にもわたるひきつけによる病の治癒という奇跡も、その対象は視覚障害・聴覚障害・肢体不自由などの病を抱えた貧民にたいしておこなわれた。ヒポクラテスの時代から知られていたヒステリーの機制を知っていた治療者は、祈禱や信仰によって一部のホームレスを治癒させたのである。

しかし1775年の神学者ガスナーに対するメスメル勝利はなるほど科学とは言えない代物ではあっても動物磁気が信仰を凌駕する、すなわち精神科治療における「聖」から「俗」へのメンタリティーの大きな転換点であった。このルーツはおそらくルターによる宗教革命にまでさかのぼれるだろう。

統合失調症をもたらした急激な環境の変化とは、いっぽうではその起源を宗教革命に求められる聖から俗へのメンタリティーの転換であり、もういっぽうではホームレスの（サルペトリエールへの）収容と分類すなわち科学的思考の始まりだったと考えられる。

#### 文 献

- 1) ゴッテスマン著、内沼幸雄、南光進一郎訳：分裂病の起源。日本評論社、東京、1993
- 2) 難波益之、貝谷壽宣編：集団遺伝学から見た分裂病。精神分裂病研究の源流。HESCO出版、東京、1987